

ベルクソンとアルヴァックスの《夢》

著者	横山 寿世理
雑誌名	白山社会学研究
号	12
ページ	19-29
発行年	2004
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007549/



ベルクソンとアルヴァックスの《夢》

横山 寿世理*

はじめに

フランス哲学者アンリ・ベルクソン(Henri Bergson, 1859-1941)と、フランス社会学者モーリス・アルヴァックス(Maurice Halbwachs, 1877-1945)がリセ・アンリIV世校において師弟関係にあった、ということは、社会学においても知られているところであろう。しかし、社会学者アルヴァックスがベルクソンからどのような影響を受け、これをどう批判し、あるいは発展させたかについてはあまり論じられてこなかった。アルヴァックスはベルクソンを主観主義的だとして批判しているとされている。その批判の矢は主にベルクソンの持続観念に向けられ、具体的な批判対象としては彼の記憶(力)論があげられる。

アルヴァックスはある集団に共通する出来事の記憶内容の生成において、個人がその集団の成員であることを説明した。その記憶内容の形成は、成員たちが同じ出来事を体験したという事実によってではなく、彼らが現在の視点から過去を再構成によるところが大きい。したがって、本稿ではまず、アルヴァックスが過去の再構成を集合的記憶の役割として考えていたことを示し、続いてこの再構成が個々人の自由な記憶を制限し、いわば拘束していると論じる。その記憶による拘束は、アルヴァックスが夢を非現実のものとして、記憶内容からはっきり区別し、排除することからも確認される。だが、記憶による拘束は、個人の意志を拘束してしまうという問題点がある。

反対に、過去の再構成を否定し、過去から現在、未来への持続を展開するベルクソンは、自由な個人の意志によって記憶内容の形成を説明する。本稿では、ベルクソンが実は社会や他人からの制約を強く意識し、それと同時に自由な意志を持った独自の自我を成立させることを見ていくことにしたい。このことは、「夢の自我」と「目覚めている自我」という自我の二重化によって明らかになる。

この二重化する自我は決して分裂した自我を指すのではない。拘束的な記憶と自由な記憶の二重作用を表すと言えよう。アルヴァックスによれば、記憶内容と夢は明確に区別されるため、ベルクソンが言うような自我の二重化や記憶の二重作用は説明できない。ベルクソンが説明した、分離できない二重の自我が、現実の行動だけに囚われない過去の記憶内容を展開させてくれる。

本稿においては、過去の再構成から逃れて、現実のものとならなかった過去の記憶内容に注目することで、自由な自我と拘束された自我という二重化された自我の様相を模索す

* 東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程

る。この自我こそが、拘束される自我と、自由に意志する自我を明らかにしてくれる。

1. 再構成された過去による拘束

アルヴァックスによると、ある集団の成員たちが体験した出来事は、集合的記憶(memoire collective)によって再構成され、その集団に共通する記憶内容(souvenir)となる。この再構成は、集団に共有される「時間的枠組み」にしたがって行われる。時間的枠組みとしての「社会的時間」とは、その社会の成員たちに共通する時間の区分のことである(Halbwachs 1950: 144= 1989: 101-2)。彼らは自らの集団の「社会的時間」を共通の基盤として、過去の出来事を共通の記憶内容として再構成する(Halbwachs 1950: 63= 1989: 16-7)。この時間的枠組みは不動の枠組みであり、集団に固有のものである。同一空間においてであっても、集団ごとに異なる時間的枠組みは相互に浸透することなく、並列して存続する(Halbwachs 1950: 189= 1989: 158)。集団に固有の時間的枠組みを基盤にするからこそ、他の集団の時間的枠組みと混同されることなく、集合的記憶は集団の記憶内容を再構成できる。

その再構成された記憶内容の存続、維持に寄与するのが、その集団が抱く空間的なイメージだと言えよう。アルヴァックスは、集団の存続を、再構成された記憶内容を取りまく空間の安定性によって説明した。「集団が占める空間の部分はすべて、成員が属する社会の構造や生活の異なった様相に同じだけ対応し、少なくともその社会の中における最も安定した部分に対応している」(Halbwachs 1950: 196= 1989: 167)。したがって、過去の記憶内容は時間的枠組みによって再構成され、その空間的枠組みによって存続する。

「集団は自分が構築した枠の中に閉じこもるのである」(Halbwachs 1950: 195= 1989: 166)。このようにアルヴァックスが述べたのは、空間的枠組みによって過去の記憶内容が存続するからだけではない。過去の再構成は集団の成員たちに共通し、唯一その集団に独自の時間的枠組みに依存するからであろう。つまり、成員は自らが属す集団に強く結びつけられているのである。過去は、空間的枠組みによって維持される以前に、時間的枠組みに即して再構成されるのだから、まずに時間的枠組みによって書き換えられ、集団に固有のものと化していく。さらに、時間的枠組みによって再構成された記憶内容は、同一環境ないし生活空間を維持することで、成員たちの間で継続的に共有されていく^{*1}。

そもそも、このように空間的枠組みへと展開され存続させられる過去は、不変的で成員間で共有される時間的枠組みによって区分されている。「時間は社会のすべての成員に対

*1 時間的枠組みと空間的枠組みの連動については、さらに詳細な検討が必要ではあり、その検討は別の機会に行いたい。ここでは時間的枠組みに照らして再構成された過去ないし記憶内容は、空間にそのイメージを表象し、安定したイメージとして存続させられると理解する。

して同じ仕方で区分されている」(Halbwachs 1950: 144= 1989: 101-2)。その不動の区分に社会の成員は否応なしに従うことになる。すなわち、アルヴァックスは集合的記憶による個々人間の共通性だけでなく、その社会的な枠組みが強烈に個人を拘束することも示している。

成員間に共通する社会的枠組みがもつ拘束力を、アルヴァックスは次のように説明している。

自分の時間を区分し調整する際に、他人とは異なったことをしたいという要求は、私たちが、社会的規律にこれほどまでに強制的に従うことなく、仕事をしたり気晴らしをするときには、より頭に浮かんでくるであろう。……私は、時計の歩みによって、または他人によって採用され、私の好みを考慮に入れられないリズムによって、自分の活動を規制することを余儀なくされる(Je suis donc obligée de régler...). (Halbwachs 1950: 144-5= 102)

このことから、社会に属する成員たちに共通する過去は、社会的時間という区分を受け入れて、この時間的枠組みに従った再構成を強制されているとすることができるだろう。不動の枠である社会的時間は、成員個人の好みに応じた過去の記憶内容の再構成ではなく、その社会に等しく所属する他人の記憶(memoire)に補完される再構成を可能にしてくれる。

アルヴァックスが過去の再構成を強調するのは、私たちの記憶内容(souvenir)は他人の記憶(memoire)の助けを借りて完成するからである(Halbwachs 1925: 21/ 1950: 52= 1989: 2-3)。過去に起きた同一の出来事に関して、他人からも同様の証言を得られることが、その過去の記憶内容の正確さを示している。ある出来事が個人的記憶ではなく、他人の記憶によって補完されるということは、個人的な実体験が「他人の視点」によって加工されることを意味する。すなわち、アルヴァックスによると、集合的記憶による再構成は、他人の視点を借りて、過去の記憶内容を正確に表象するのである。

事実、アルヴァックスは「私たちがまったく個人的確信だとおもっていても、じつは新聞や本や会話の中から得た意見を述べていることがどれほどあることだろうか」(Halbwachs 1950: 89-90 = 1989: 36)、とさえ述べている^{*2}。つまり、集合的記憶は個人的な記憶より確かな記憶内容を再構成すべく、個人が自由に想起する記憶内容を改変し、不動の枠組みに適合させる。言い換えると、個人の自由な意志が集合的記憶においては社会的枠組み内へと制限され、拘束されているのである。

*2 しかしながら、アルヴァックスが個人の意志の力を全く考慮していなかったとはいえない。なぜなら、アルヴァックスは『集合的記憶』において次のように述べているからである。「記憶内容を決定する集合的要因をまったく明瞭に認めることも、記憶内容が何よりも私たちの意志の力に従うことがないという幻想を抱くことも、それほど確かなことではない」(Halbwachs 1950: 77= 1989: 36)、と。邦訳版では省略されているが、原典では、この引用箇所後に長いメモが付いている。今回はメモ部分についての検討は行わず、アルヴァックスの集合的記憶論がもつ集合的要因を強調しておく。

2. 抑制される夢

集合的記憶による拘束により記憶内容の正確さを説明する、アルヴァックスは夢と記憶内容(souvenir)^{*3}とを明確に区別する。というのは、夢は過去と混同された現在でしかなく、現実とはかけ離れているからだ。記憶内容は過去の出来事を社会的枠組みにはめ込むように再構成されるもので、夢のように現実と混同されない。ここでは過去の再構成により拘束されるアルヴァックスの夢について明らかにする。

これとは反対に、ベルクソンにとって、「目を覚ましている状態で、一つの対象について私たちの認識は、夢の中でなされているものと似た操作を含んでいる」(Bergson 1901: 99=1992: 118)。つまり、アルヴァックスが指摘するように、ベルクソンは夢と記憶内容との間に根本的な差異を設けない。ベルクソンは目覚めている状態では、その知覚と記憶内容が完全に一致すると考える(Bergson 1901: 102 = 1992: 122)が、夢の中でのイメージ(image)は、現実の知覚や感覚とうまく整合しないと説明する(Bergson 1901: 105=1992: 125-6)。つまり、目覚めているときの記憶内容と夢との違いは、感覚との整合度の違いでしかなく、その操作自体は同じということになる。

記憶の作用そのものより記憶内容の確からしさを追求したアルヴァックスにとって、実際過去に起こった出来事についての「記憶内容と夢とはとりわけ相いれない」(Halbwachs 1925: 37)。アルヴァックスは「現実的で完全な記憶内容は、決して私たちの夢に入り込まない。……私たちの夢はあまりにも多様な記憶内容の断片で作られ、他の記憶内容と混じり合っているので、私たちは夢を再認できない。」(Halbwachs 1925: 21)、と述べている。

夢は記憶内容と違って、不明確で、非現実的である。夢が知人や知っている場所、さらには感情や態度のイメージによって捉えられるのに対し、記憶内容は社会的枠組み、特に社会的時間によって再構成された過去の出来事を表す。「記憶内容は独立では表されない」(Halbwachs 1925: 33)のであって、社会的枠組みに基づいて再構成されることで、正確で安定したものになる。

アルヴァックスは、記憶内容の形成において、社会の中での他人との関係を強調し、記憶内容が非現実的な夢とは異なり、確固とした空間イメージを持っていると考えていたようである。実際、彼は「私たちの記憶内容は、他人の記憶の中に、事物の変わらぬ外観で保存されていた」(Halbwachs 1925: 21)、とも述べている。記憶内容が夢から区別されるのは、事物のこのような不変さによるところが大きい。

しかし、人が眠っているあいだの記憶作用は合理的でない。通常、合理的作用は秩序立てられ、首尾一貫した社会環境においてのみ発揮される、とアルヴァックスは言う

*3 本稿において、アルヴァックスとベルクソンの違いを問わず、*mémoire*は「記憶」、*souvenir*は「記憶内容」と訳し、統一する。アルヴァックスにおいても、ベルクソンにおいても*mémoire*が記憶の作用であり、*souvenir*がその内容である。アルヴァックスの『集合的記憶』の訳者、小関藤一郎は前者を「記憶」、後者を「思い出」と訳している。ベルクソンの著作の訳者たちがこれらの語に与えた訳語は多岐にわたる。*mémoire*を「記憶力」ないし「記憶作用」、*souvenir*を「記憶」ないし「記憶内容」との訳がある。

(Halbwachs 1925: 38)。その合理的な作用を支えるのが、他人の記憶内容であり、社会的な枠組みである。つまり、他人と共有される社会枠組みによって、記憶内容が合理的に補完される。うろ覚えの記憶内容が、その記憶内容となった出来事を一緒に体験した他人によって、補われ、明瞭になるということを私たちはよく経験する。

「私たちの記憶内容が他のすべての人々の記憶内容と強固な社会の記憶枠組みとを支えているのに、夢は夢自体だけに依拠している」(Halbwachs 1925: 39)。夢は記憶内容のような安定性や正確さを持たない。というのは、社会の記憶枠組みによる再構成を被っていないからだと考えられよう。過去の再構成によって記憶内容は正確に表されるのだから、再構成されない記憶内容は個人の自由奔放な出来事の羅列に等しいと言えよう。記憶内容の断片でしかない夢は、まさしくこの自由奔放な個人の意志を象徴している。

再構成されないために、何ら制約を受けない夢は、詳細で正確な記憶内容を表すことはできない。アルヴァックスが夢を記憶内容から区別するのは、以上のような訳である。それゆえに、アルヴァックスは夢と記憶内容を明確に区別しないベルクソンを批判したのだと考えられる。

けれども、アルヴァックスは個人の自由な意志に確かな力を与えることはしていなかったと言える。集合的記憶は社会という枠組みによって記憶内容を再構成するため、記憶内容の詳細を補完し、これがある集団に共有されたものであることを教えてくれる。しかし、記憶内容の共有は、個人を成員として社会に従属させるばかりで、自由な意志の力を制約してしまう。そうしなければ、夢と同じく、個人の自由な意志によって、集合的記憶という社会的拘束力から外れた記憶内容は、その正確さを失い、断片的になってしまう。

3. 二重化する自我

アルヴァックスは夢を、過去の断片が非合理的に、ないし無秩序に展開された不確かなイメージとして捉えていた。したがって、夢は集合的記憶によって再構成を受けないまま、現実的な社会に適合しないイメージである。「夢で見た子供の頃の記憶内容がかつて知覚した現実とうまく一致することを確認するには、他人の記憶を用いたり、客観的な調査や検証に従わなければならない」(Halbwachs 1925: 9)。このようにアルヴァックスが述べたのは、集合的記憶による過去の再構成に、記憶内容の確からしさを担わせていたからであろう。

ベルクソンも、夢の中で働いている記憶について「目覚めているときよりも自然」で、「夢の中では、意識は……なすべき行動のことは考えない」(Bergson 1908: 128 = 1992: 147)と言い、夢のもつ非現実性は認めていた。しかし、ドゥルーズがベルクソンの持続について指摘していたように、ベルクソンは過去を再構成できないものとして考えていた(Deleuze 1966: 53 = 1974: 59)。それゆえ、過去の記憶内容についての夢を、再構成し、現実と一致させることもなかったのである。また、夢における記憶と、目覚めているときの記憶とを別の作用として考えることもなかったのである。

では、ベルクソンにとって、目覚めている状態と夢見ている状態との違いは何なのだろうか。夢は記憶による拘束を受けることなく展開されているにも拘わらず、目覚めている

状態と区別されないということは、非現実を現実と混同させることにならないのか。

ここで、ベルクソンは記憶内容の形成をどのように説明するのかを見ていきたい。

ベルクソンの記憶論において、記憶内容(souvenir)は「身体の記憶(memoire du corp)」と「自発的記憶(memoire spontanee)」という二つの記憶によって、脳のいずれかに保存されるのでもなければ、社会にでもなく、過去「それ自体」として保存される。

車で道に迷っている最中、または道に迷ったと思ったとき、いま走っている道は前にも通ったことがある、と気づくという経験は誰にでもあるだろう。この道が前にも走ったことのある道だと気づくのは、前に走ったときの記憶内容と現在の道に関する知覚が一致したからである。そして、この一致を期に、次に曲がるべき交差点を予測することもできる。迷っていると思ったのは、過去の記憶内容と現在の記憶内容がうまく結びつけてイメージできなかったからである。つまり、過去と現在の差異にばかり気を取られ、過去と現在の類似に気づけなかったと言えよう。しかし、このことに気づいた後、いまの行動が過去の繰り返しであることすら理解できる。また、以前走ったときには気づけなかった風景、すなわち過去の繰り返しではない部分にも気づくことができる。

過去の記憶内容と類似したイメージを繰り返して呼び起こすのが「身体の記憶」の作用であり、過去の記憶内容と現在の知覚との異なったイメージを一回限りのものとして記録するのが「自発的記憶」の作用である。この二つの記憶は補い合って、過去を再構成することなく、過去それ自体を保存するのである。というのは、過去の繰り返しに気づくとき、同じような記憶内容の中から、現在の知覚に類似するものだけを選び出しているからである。類似の知覚が可能だということは、たくさんの記憶内容のそれぞれが、一回限りの差異あるものとして残存しているからである。さらに言うと、現在の知覚と過去の記憶内容の接合も、一回限りのものとして記録されるからこそ、未来における過去の記憶内容として作用しうる。

したがって、過去の行動を習慣的に繰り返させるような「身体の記憶」と、一回限りの記憶内容を記録する「自発的記憶」は、記憶内容が形成されるとき、互いに同時に働いているのである。ベルクソンはこれらの記憶の片方が強力に働いてしまう場合を次のように説明する。「身体の記憶」だけ働かせる人は、自動人形ないし俳優であり、「いつも習慣によって動かされるわけで、ある状況の中に見てとるものといえ、先立つ状況と実際的に類似した側面のみであろう」(Bergson 1896: 172= 1965: 175)。反対に「自発的記憶」だけの人は、過去の数限りない詳細な事情をあらゆる瞬間に見て取ることができ、「イメージが他と異なっている点を見て、似ている点を見ない」(Bergson 1896: 172= 1965: 175)(強調: 原著者)。

ベルクソンは同一の人間がもつ記憶を再生と録画という二つの作用に見立て、これら二つの作用が同時に生じていると考えていた。習慣的に行為を再生する俳優になってしまうことも、詳細な事情を記録するだけの観客になってしまうことも、ベルクソンは許さなかった。彼は録画と再生の同時性を求めていたと言えよう。この録画と再生の同時性を、ベルクソンは夢と目覚めの合間に生じる「二重化する自我」として提示してくれる。

ベルクソンは「状況の求めるものにに応じて思考し、行動する自我」と、すでに体験された記憶内容を現在においても反復する自我とを区別する(Bergson 1908: 139= 1992: 161)。前者を「目覚めている自我(moi de la veille)」と、後者を「夢の自我(moi du reve)」

と呼ぶ。一方の「目覚めている自我」は「現実の生の中に入って、自分の意志の自由な努力によって、この生に適合する」(Bergson 1908: 139= 1992: 161)ことができる。目覚めている自我は機械的に行動を演じる自我とは無関係に、「自発的記憶」によって、その演じ手の動きを自らの眼に録画する観客だ、と考えられる。もう一方の「夢の自我」は習慣的に行為を再生させる「身体の記憶」だけの自我であり、ひとつの役割を繰り返す俳優になぞらえることができる。

このような自我の二重化をベルクソンは次のように説明する。

夢は目覚めている状態に付け加えられるものではない。……目覚めているというのは、夢の拡散した生のすべてを、実際的な問題が提起されている点でたえず除去し、選び、集めることである。目覚めているということは、意志することを意味する。意志することをやめ、生から離脱し、無関心になるならば、まさにそのことによってあなたは目覚めている自我から、夢の自我へと移行する。(Bergson 1908: 128= 1992: 148)

つまり「目覚めている自我」と「夢の自我」は、自分自身に関する二つの見方の揺れ動きである。眠っている間の夢は意志が拡散した状態で、現実には適合するような記憶内容を投影することができない。現実に応じた行動を強く意志するとき、私たちは目覚める。目覚めた自我は現在の知覚であり、夢の自我は過去の記憶内容であるが、この二重化した自我は移行過程の途上でしかない。

したがって、ベルクソンは目覚めている状態と夢見ている状態に根本的な違いをおかない。そればかりか、それら二つの状態は二重化する自我の移行過程でしかないとする。その過程の一環として非現実な夢から覚め、現実へ適合する記憶内容を選択するのに、現在を的確に知覚し、適切な行動を意志する「目覚めている自我」が必要になる。

アルヴァックスが社会的枠組みによる過去の抑制を必要としたのに対し、ベルクソンは夢という非現実を自由な意志の努力によって、現実に適応させようとした。つまり、ベルクソンは、アルヴァックスが取り除いた意志を、拘束することなく、解放することによって現実に適応した記憶内容を映し出し、記録しようとしたと言えよう。

4. 自我の並立

アルヴァックスが拘束した個人の自由な意志に、その重要さを認めたベルクソンは、その意志が制約される必要を感じてはいなかったのだろうか。アルヴァックスが指摘したように、意志は自分勝手に、好き気ままに作用しないのだろうか。つまり、ベルクソンは無意識のまま、習慣的に過去を反復する「夢の自我」がもつ「身体の記憶」を重視しなかったのか。

ベルクソンは夢見ている状態にある「身体の記憶」について次のように述べる。

夢それ自体は、過去の一つの復活にすぎない。しかしそれは私たちが認識できない過去なのである。……散在する記憶内容(souvenirs)の断片があって、記憶(memoire)が

これらを集め、首尾一貫しないかたちで、眠っているひとの意識に対して提示する。
(Bergson 1901: 93-4= 1992: 112)

夢とは、ベルクソンにとって、現在において現実化しなかった過去にすぎない。そのような意味で、夢は非現実かもしれないが、首尾一貫しないかたちで提示された夢という過去は、現実化する可能性を持っていたのである。なぜなら、「記憶(memoire)の根底に宿っている記憶内容(souvenirs)が、そこで無反応で、無関係なままでいると考えてはならない。それらの記憶内容は待機中で、まずは注意を払っている」(Bergson 1901: 99= 1992: 1189)からだ。

夢において、過去の記憶内容の断片がバラバラに羅列されるのは、自発的記憶によって現在の知覚への適合が図られないからであろう。しかし、仮に、その断片的な過去の記憶内容が順序立てられ、展開されるとしたら、それは身体の記憶によって、現在と似通った過去が繰り返されていることになる。その場合に注意しなければならないとベルクソンが言うのは、その繰り返される過去が同じ過去ではなく、現在と類似しているにすぎないということである。

また、その類似性に気づくことができるのは、現在の知覚と過去の記憶内容の差異を捉えることができたからだと考えられる。ベルクソンが記憶内容と知覚の類似性をめぐって、自発的記憶と身体の記憶の連関について、どれほど詳細に提示していたかについては、多くの議論を積み重ねなければならないであろう。しかし、その議論を待つまでもなく、現在の知覚と過去の記憶内容との類似性に、目覚めている自我の意志によって、認識するからこそ、現在だけに固有のイメージを記憶内容として登録することができると考えられよう。つまり、身体の記憶は、瞬間ごとに限らない事情を記録する自発的記憶を前提とするからこそ、似通った記憶内容を繰り返せるのであり、逆に、自発的記憶も身体の記憶による類似する記憶内容の反復を前提とするからこそ、詳細な事情を記録できるのである。

これら二つの記憶について自覚する二つの自我についても、同様のことが言えるだろう。「夢の自我」は過去を無意識に反復するだけであり、同じ役割を演じる俳優にすぎない。反対に「目覚めている自我」は現在の状況から判断して、最も適切な行動を新たに遂行することができる。しかし、「夢の自我」が同じ役割しか果たしていないことに気づくには、無意識であってはならず、自らの行動を自覚、意志しなければならないと考えられる。この意志を努力させるのは「目覚めている自我」であり、「夢の自我」を観察することもできる観客としての自我である。意志を弛め、拡散させてしまえば、「目覚めている自我」は眠りだし、反対に、意志を自由に働かせれば「夢の自我」は目覚めることになるだろう。

この自我は自分の記憶内容と知覚をどの程度自覚しているかによって、二重化される。けれども、二重化しているにすぎず、分裂しているわけではない。そのような意味で、「目覚めている自我」と「夢の自我」は並列している。目覚めている自我が眠り込んで、現実とは合致しない夢を映し出したとしても、その夢は認識されない過去であり、待機している記憶内容を表す。つまり、夢は現在において現実化しなかった過去にすぎない。その夢は、未来において現実化する可能性をまだ失っていない。

眠っている自我は、目覚めても眠っている。なぜなら、自我が目覚めることで、現実に繰り返されることになる過去の記憶内容を再生すると同時に、現在の状況に不必要な記憶

内容を夢のまま保存しておくからである。つまり、反復される記憶内容があるから、反復されない詳細な記憶内容が自発的記憶によって記録される。また「夢の自我」が認識しない詳細な過去を、断片的に表出するのは、自発的記憶によって現在に不要な記憶内容が詳細に記録されていたからだと推察される。

現実の知覚と類似する過去の記憶内容は、実は、数知れない夢を背後に含んでいたのである。このことから、同じ役割を演じるだけの夢の自我が、あるいは習慣的行為を繰り返させる身体が、いかに夢を抑制し、拘束していたかがわかる。というのは、夢の自我が自覚するのは繰り返される似通った記憶内容ないし同一の役割であり、断片的で、認識されない過去の記憶内容、すなわち夢ではないと言わざるを得ないからだ。夢の自我が同じ役割を繰り返しているだけで、現実には無関心であるということに気づくと、自我は夢から覚め、目覚めている自我へと移行すると考えられる。

したがって、同じ役割だけを繰り返して演じるだけの夢の自我は、身体記憶によって、繰り返す過去の記憶内容を制限されている。こう言ってよければ、夢の自我は習慣的行為だけを反復するように拘束されている。目覚めている自我が持つ自発的記憶は、意志の努力で、夢の自我が被る拘束性を明らかにしてくれる。さらに、目覚めている自我が、夢の自我が繰り返しただけの役割とは異なる現在の状況に適合する、新たな役割を詳細に記憶するからこそ、自我は再び未来における過去の役割を繰り返し、意志によって新たな役割を記憶することができる。けれども、その新たな役割は未来において実現するであろうもので、現在のものではないから、現在においては夢である。

気ままに働く意志の力だけをベルクソンが重視していたと考えるのは、偏った見方であろう。ベルクソンが明らかにした夢の自我がもつ拘束された記憶内容と、目覚めている自我がもつ意志の努力によって自由なる夢とは、互いに分離することができず、互いに前提としあっている。

おわりに

過去の記憶内容を集合的記憶によって拘束的に再構成するのが、アルヴァックスであった。アルヴァックスによれば、再構成される記憶内容は、その記憶内容を共有する集団の成員に共通するだけでなく、より詳細な事実まで呼び起こすことができる。それゆえ、彼は、現実と混同されてしまう記憶の根底に潜んでいる記憶内容を、夢として過去の記憶内容とは区別した。だが、アルヴァックスの集合的記憶は、記憶内容を拘束するだけで、個人の意志を制限してしまうと言わなければならないだろう。

一方のベルクソンは、「目覚めている自我」と「夢の自我」という二重化した自我によって、記憶による拘束と、個人の意志の自由を両義的に提示したと言える。現在の状況に順応した行動の遂行は、過去において体験された類似の記憶の繰り返しにすぎない。その繰り返しは、「夢の自我」が担う役割だ。現在遂行された行動が、すでに経験された行動であると認識することは、多くの記憶内容の中から、現在の知覚に類似したものだけをイメージすることである。このイメージは、イメージされなかったその他の無数の記憶内容を背後に潜ませている。現在に類似した過去の記憶内容も、別の機会に潜在していたから

こそ、現在に適合したイメージとして浮かび上がってくる。現在の知覚に適合した過去の類似した記憶内容に気づくとき、眠っていた自我は目覚め、「目覚めている自我」へと移行する。この「目覚めている自我」は、過去とは類似しない現在の特殊性も記録する。

しかし、「目覚めている自我」によって明らかになった現在の特殊性は、未来において再び類似した現在として喚起されるとは限らない。もし再び自我が眠りだせば、現在における過去から引き続き類似するイメージだけを反復するだけになってしまう。このとき、未来における現在の特殊性は除去され、類似だけが抽出されている。この場合、やはり自我は眠りだし、目覚めていた自我は「夢の自我」へと再び移行する。

「夢の自我」は過去をバラバラに反復するだけで、過去の記憶内容と現在の知覚は、夢においては適合していない。身体のみ記憶しか働いていないからだ。夢の中では、現在と類似しないような過去が、不統一に、非合理に反復される。したがって、この夢について考えをめぐらせると、未来における過去すなわち現在の現在が、未来における現在において、夢として、確かに残存していることがわかる。つまり、未来における現在の状況や環境に拘束されない潜在的な過去の残存である。けれども、現実と合致しない過去を喚起している夢の中に自分がいるということに気づくとき、私たちの自我は「夢の自我」から「目覚めている自我」に移っていく。この二つの自我間の移行は、やむことなく展開していくと考えられよう。

拘束されている記憶内容とは反復される夢であり、現実化しなかった夢のままの潜在的な過去である。つまり、「夢の自我」は拘束される。しかしながら、「夢の自我」の拘束性に気づくとき、その自我は夢から覚め、「目覚めている自我」となる。「目覚めている自我」は現在の状況に合うように、行動を自由に变化させることができる。つまり、「目覚めている自我」は意志する自我である。これら二つの自我の間の移行を区切ることはできず、二つの自我は二重化している。

ベルクソンの言う「目覚めている自我」と「夢の自我」を押し広げて考えると、社会的拘束と自由な意志の二重化を指摘することになる。アルヴァックスの集合的記憶論において、拘束が一辺倒に強調されてしまったのに対し、ベルクソンの自我においては社会的拘束と自由な意志を両義的に語る可能性をもっている。この両義性はベルクソンが『道徳と宗教の二源泉』において次のように述べたことの意味ではないだろうか。

人間は自分が自由である場合にしか、拘束を感じない、そしてこの拘束は、ひとつひとつをとれば、自由を含んでいる。(Bergson 1932: 24)

【文献】

- Bergson, Henri, [1889] 1997, *Essai sur les donnees immediates de la conscience*, Quadrige/PUF. (=2001、中村文郎訳『時間と自由』岩波書店)
- , [1896] 1999, *Matiere et memoire*, Quadrige/PUF. (=1965、田島節夫訳『物質と記憶』(ベルグソン全集第2巻)白水社)
- , [1901] 1999, 'Le reve', *L'energie spirituelle*, p.83-109, Quadrige / PUF. (=1992、宇波彰訳『精神のエネルギー』第三文明社)
- , [1908] 1999, 'Le souvenir du present et la fausse reconnaissance', *L'energie spirituelle*, p.110-152., Quadrige / PUF. (=1992、宇波彰訳『精神のエネルギー』第三文

明社)

——, 1932, *Les deux sources de la morale et de la religion*, Quadrige/PUF. (=1965、中村雄二郎訳『道徳と宗教の二源泉』(ベルグソン全集第6巻)白水社。)

Deleuze, Gilles, 1966, *Le bergsonisme*, Quadrige/PUF (=1974、宇波彰訳『ベルクソンの哲学』法政大学出版局)。

Halbwachs, Maurice, [1925]1994, *Les cadres sociaux de la memoire*, Albin Michel.

——, [1950] 1997, *La Memoire collective*, Albin Michel. (=1989、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社)

横山寿世理、2002「個人的自我と社会的自我の同時的な相補関係--ベルクソンの社会感覚」『日仏社会学会年報』第12号、63-82頁。